

H 2 7 年 度
「患者と家族のがん研究基金」実績報告会
Cancer Research Funds for Patients and Family

プログラム抄録集

日 時 平成 28 年 5 月 27 日

午後 6 時 3 0 分 (総会終了後)

場 所 千葉県文化センター 5 階セミナー室

主催 NPO 法人 医療・福祉ネットワーク千葉

～次 第～

◇ 開会の辞 竜 崇正 (理事長)

◇ 司会・成果発表

座長 永瀬 浩喜 (千葉県がんセンター研究所所長)

1、『卵巣細胞腺癌患者におけるARID1A遺伝子異常の解析』

千葉県がんセンター研究所 発がん制御研究部 丸 喜明

卵巣明細胞腺癌(OCCA)は化学療法抵抗性を示す難治がんで、本邦における発生頻度は欧米に比べ3倍以上高いが、病因には不明な点が多い。我々は、がん拠点病院におけるクリニカルシーケンシングの導入を見据え、OCCAのホルマリン固定パラフィン包埋サンプルを用いて409のがん関連遺伝子の変異検索を行い、PIK3CAやARID1AなどOCCAで頻度が高いとされる体細胞変異を複数の症例で確認した。さらに、特にOCCAで変異頻度の高いARID1Aに注目し解析を進めており、これまでの成果を報告する。

2、『同一患者内に複数のリンパ腫が混在する Composite Lymphoma の臨床的及び分子生物学的見解』

千葉県がんセンター腫瘍血液内科 小野 敬子

同一患者に2種類以上のリンパ腫が混在するものを、Composite lymphoma (CL) という。当院に蓄積された症例の中から、3パターン of CLを見出した。1) 濾胞性リンパ腫にホジキンリンパ腫が混在する5例：組織FISH法により両者が同一起源であることを証明した。2) びまん性リンパ腫とホジキンリンパ腫の中間型3例：WHO分類の記載とは異なる新たな疾患単位である可能性を示した。3) B細胞とT細胞リンパ腫の合併2例：サザン法により細胞起源が異なる両者の合併を証明した。

3、『長期生存悪性グリオーマ患者におけるメチオニンPETを利用したテモゾロミド長期投与の必要性の検討』

千葉県がんセンター脳神経外科 廣野 誠一郎

【背景】膠芽腫におけるTMZ維持療法をいつまで継続すべきかについて確立されていない。

【対象・方法】維持療法としてTMZを12クール以上施行後にMet-PETを撮影した膠芽腫症例を対象とし、T/N比と、その後の再発の有無を分析した。

【結果】対象は35例でPET後1年での再発の有無とTMZ12クール終了時のT/N比の関係をロジスティック回帰分析し、T/N比1.93がcutoff値と算出された。PET後に治療を終了した症例の、PET後1年での再発率はPET陰性例で24%、PET陽性例では50%で、T/N比1.93に設定したcut off値の再発に対する感度・特異度はそれぞれ67%、87%だった。PET陰性で治療を終了した群、PET陽性で治療を終了した群、PET陽性で治療を継続した群におけるPET後1年での無再発生存率はそれぞれ76%、50%、15% ($P<0.001$, log-rank)で、PET陽性例は治療を継続しても半年以内に8割以上の症例で再発を認めた。

【結語】長期生存GBM患者でTMZ12クール終了後のT/N比が1.93を超える場合、TMZを継続せず治療方針の変更を検討すべきである。

4、『高発癌性疾患に対するゲノム編集とiPS細胞を用いた先制医療』

千葉大学大学院医学研究院 小児病態学 藤井 克則

ヘッジホッグシグナルは高度に保存された細胞増殖経路であり、リガンドのHedgehog、受容体のPTCH1、隣接タンパクのSMO、転写因子のGLIより構成され、本経路の異常は発癌と先天奇形を来す。我々はPTCH1遺伝子変異により発症するGorlin症候群の研究を通じ、ヘッジホッグ経路が生体に及ぼす影響を多角的に研究してきた。現在ゲノム編集とiPS細胞を用いた先制医療を目指しておりその内容を概説する。

5、『大腸癌切除不能同時性肝転移に対する周術期ステロイド投与の効果の検証』

千葉大学大学院医学研究院 先端応用外科 大平 学

切除不能肝転移を有した状態での原発巣切除術は、高度な担癌状態で免疫能が低下したところに侵襲が加わることになり、術後合併症が高率に発生する。当科ではこのような症例に対して術後合併症、肝不全予防の目的で周術期ステロイド投与を行っている。自験例の遡及的検討で、術前から肝機能障害を伴っている（癌による肝細胞破壊が進んでいる）症例に対しては、術前からのステロイド投与が術後合併症の軽減に有効な可能性が示唆された。